

銀行信用・利子生み資本の論理的前提

——信用論批判——

小 牧 聖 徳

- 一 はじめに
- 二 問題点と解決方向
- 三 問題解明の根本問題 その一
- 四 問題解明の根本問題 その二
- 五 商業信用と本来的貨幣信用
- 六 総 括

一 はじめに

銀行信用・利子生み資本にかんする問題は多くの研究者によって批判検討が積重ねられてきている。たとえば貨幣・信用論研究三〇年（経済評論一九六七年六月）を一瞥しただけでも、その中に多くの研究者の業績が紹介されている。ここでは戦後インフレーション研究、利子つき資本論争、不換銀行券論争、現代インフレーション論、不換銀行券論争の国際版、スタグフレーション論、信用の必然性、商業信用をめぐる論争、銀行信用とは何

銀行信用・利子生み資本の論理的前提（小牧）

か―信用創造か媒介か―、中央銀行―発券集中の根拠、信用制度と株式会社等に分けてそれぞれの問題点と問題解決の方向が示唆的にのべられている。わが国の貨幣・信用論の研究水準を紹介する意味をもちかねて多くの文献が紹介されているが、問題点の指摘はともかくとして解決の方向がここでのべられているような方向で展開されるとすれば、わが国の貨幣・信用論は遠からず行きづまるのではないかと危惧せざるを得ない。これが現在の水準とすれば多くの研究者は三〇年間もの長きに涉つて、当然、検討されなければならない前提をおろそかにして、正当ならざる前提から出発して、その上に様々な論理を観念的につくりあげていたことになる。

学問研究の発達は既存の諸学説を批判的に検討することによつてすすめられなければならないが、その場合の出発点となるものが正しく理解され把握されていないときには、論理の進展にもなつてつじつまが合わなくなり、ついに問題を投げ出すか、あるいは自己の都合のよいように解決することに骨を折ることになりかねない。

これでは学問的進展は望めない。とりわけ論理の出発点をなす前提を何ら疑うことなく正当なものと信じ込んで、それに追隨する多くの研究者は、みずからのあやまりに気づくことなく、また気づいたとしても余りにも遅きに失し、無駄な時間をあやまった前提に立つて費すことになる。その意味からしても、あやまれる理論は批判され検討されなければならないだろう。いわゆる学派の形成なるものも、先駆的業績に追隨する多くの研究者によつて支持され批判されるなかで、一定の地歩を占めるものとなるが、批判に対しては謙虚に耳をかたむける姿勢がなければ科学の進歩は望めない。われわれは科学的真理に対しては謙虚でなければならぬ。本稿で論及しようとする諸課題も多くの研究者の努力にもかかわらず極めて遺憾ながらあやまれる前提から出発したあやまれる理論の展開となつている。このようなあやまりを学界に持込んだ貨幣・信用論の領域での先駆者はヒルファディン

グ (R. Hilferding) であるといえる。周知のようにヒルファディングは「資本論」を継承して信用論の領域ではマルクスの学説を發展させたものとして位置づけられている。一面ではそうであるが、他面ではそうではない。わが貨幣・信用論の研究者のなかにもヒルファディングの考え方に影響されすぎてヒルファディングと同じあまりにおちいっていると思われるひとも多い。貨幣・信用論研究はヒルファディングやその追隨者たちのあやまれる理解から離れて、正しい前提に立ち帰って再検討することが緊急の課題と思われる。

二 問題点と解決方向

貨幣・信用論研究三〇年(經濟評論一九七六年六月)のなかでそれぞれの項目に付記されている今後検討すべき課題とその方向をみると、利子つき資本論争については『貨幣信用』規定の取扱をめぐって商業信用は信用制度の基礎という規定と、利子生み資本は信用制度の基礎という規定の関係を具体的に位置づけねばならない段階に來ている(前掲書一一六頁)とあり、不換銀行券論争については「この論争も一〇年たつて商業信用から銀行信用への上向が進むにつれて解決の条件が形成されて來ている(前掲書一一八頁)とある。また現代インフレーション論争については「一般的にいつてマルクス経済学から現代インフレーションの究明は低調であるといえる。それは資本論一卷一階段の分析で足れりとして、信用インフレ、独占価格はともかく賃金上昇などにはふれようとせず、基底還元主義に安住しようとする傾向があるからである(前掲書一一九頁)との指摘があり、さらに不換銀行券論争の国際版については「さらに現実の問題は金交換停止以後の国際通貨ドルの流通根拠は何か、これは不換銀行券論争の国際版であつて新しい課題である(前掲書一二〇頁)とある。スタグフレーション論については

「理論研究と現状分析の交流は乏しく、前者は現実への展望をもたないまま体系の整合性のみを追い傾向がある」(前掲書一二二頁)とのべられてあり、信用の必然性にかんしては「信用の必然性を指摘した規定『流通時間なき流通』の希求と『資本所有の量的制限』の止揚は『資本論』の資本制生産における信用の役割の二つの柱、流通費の節約と株式会社の推進(資本の集中)の規定を根底にまで掘下げて理解することを容易にした」(前掲書一二二頁)と積極的な評価が与えられている。そして商業信用をめぐる論争において「(1)商業信用は単純商品生産の範疇か資本制生産の範疇か(前掲書一二三頁)、(2)商業信用において貸付けられる対象は何か。商品か貨幣か(前掲書一二三頁)、(3)商業信用における実現の時点はいつか。商品引渡時点か代金支払時点か(前掲書一二四頁)、(4)商業信用において節約されるものは何か。資本(あるいは資金)か貨幣か(前掲書一二四頁)、(5)商業信用の限界とは何か。資金節約の限界か貨幣節約の限界か(前掲書一二五頁)」と多くの論争点が表示されているが、これらの問題は当然、銀行信用にも結びつく問題である。そこで銀行信用とは何か―信用創造か媒介か、の項で利子つき資本論争での指摘と同じく「貨幣信用」の問題が提起されている。すなわち「資本論」における「貨幣信用」とは何をさすのかについての説明が銀行信用の場合にも重要だとの見解であり、「資本論」における貨幣信用(正しくは本来的な貨幣信用)にかんして、それをどのように理解するかが、銀行信用の理解に関連するものとされている。ここに信用制度とりわけ商業信用、銀行信用や利子生み資本にかかわって「貨幣信用」の規定をどのように理解するかが、貨幣・信用論研究の中心課題だとする見解がみられる。しかし「貨幣信用」を正しく理解するには商業信用、銀行信用、利子生み資本にかんする「資本論」の各箇所の理解では十分でなく「資本論」そのものの根本的理解から出発しなければ正しい理解に到達することはできない。「資本論」の正しい理解なしには貨幣

・信用論は正しく展開され得ないということは当然であるが、しかし貨幣・信用論研究者にとっては深刻に反省しなければならぬ問題点である。研究対象を貨幣・信用問題として等しくしている研究者のなかに、安易に先駆者の業績をうのみにしたり、また「資本論」から出発して曲解の上に立った理論展開などもあり、これらに対してはきびしい批判とともに、その方法論の当否にかかわる根底的な批判検討を必要とすることになる。したがって今日到達している学界の水準そのものを問題とし、克服するほどのものでなければならぬし、「資本論」に立脚した貨幣・信用論は「資本論」の方法論的理解の前提に立たなければ正しく展開され得ないことを寛らなければならない。

三 問題解明の根本問題 その一

商業信用、銀行信用、利子生み資本の相互関連にかかわって、まず商業信用にかんして商業信用は単純商品生産の範疇か資本制生産の範疇か、という問題提起のなかで「商業信用の規定もたんなる掛売り掛買い一般から資本制商業信用に限るべきだ」という主張がでてきた。これは「資本論」冒頭の商品の性格規定が単純商品から資本制商品に推移してきたのと共通している。今日では商業信用といえは資本制商業信用をさすのが通説になっている（『経済評論一九七六年一二三頁』）として「資本論」冒頭商品の性格規定にふれられている。これは商業信用の理解のためだけでなく、経済学を理解にも及ぶ根本的な問題である。

そもそも「商業信用は単純商品生産の範疇か資本制生産の範疇か」と問題を投げかけるとき、あれかこれかではなく両者であるというのが正しいときに、資本制生産の範疇だとするのが通説だとして、すでに解決されて了っ

ているような論争の紹介は、まだ本当に解決されていない問題をすでに解決済みとすることになりかねない。それ故にこの問題は資本制生産と単純商品生産との異同のみならず、「資本論」の研究対象は何であったかを根本的に問い直すことから始めなければならない。周知のように「資本論」は冒頭に「資本制的生産様式が支配的に行われる諸社会……」とあるが諸社会であって一社会でなく、また支配的なものは資本制的生産様式であるが、支配的でないけれども、従属的なものとして非資本制生産様式も併存している諸社会がまず問題となっている。研究対象は資本と労働のみから成立っている諸社会でなく、資本と労働が支配的であるが全面的であるとはべられてもいないし、したがって資本制的生産様式を支配的な生産様式とする諸社会が対象になっているのである。さらに「……諸社会の富は一の『老大な商品集聚』として現象する」のであるが、それを形成する「個々の商品」も視野に入れられている。すなわち「商品集聚」と「個々の商品」、社会的全体的なものと同個別的なもの両者が念頭におかれている。したがって資本制的商品はもとよりとして、いやしくも資本制社会に存在すれば、それが資本制的に生産されていなくても、資本制社会に存在する商品としてマルクスは当然、研究対象のなかに包含して研究をはじめるとするのが当然であろう。資本制的商品というのは剰余価値を含んだ商品で剰余価値を捨象して単純商品があらわれるときにも、それは単純商品として資本制生産以前に存在していた歴史上の商品であるだけでなく、資本制社会のなかの剰余価値を含んでいない商品として、剰余価値を含んだ商品と一しよに現実に存在している商品なのである。そして資本制社会に存在する商品がマルクスによって研究対象とされているのであって、その中には剰余価値を含んだ商品も、また剰余価値を含んでいない商品も、資本制社会に存在する商品として資本制社会の富を形成しているのである。それ故「商業信用は資本制生産の範疇か単純商

品生産の範疇か」という設問についても、商品が資本制社会の中で信用によって流通することによって資本制社会に存在する信用となる。そして剰余価値を含まない商品の信用による流通と、剰余価値を含む商品の信用による流通とをくらべて一方は単純、他方は複雑であるとしても単純なものから複雑なものへの論理的展開のまえに、歴史的遡及すなわち下向的分析によって到達した単純商品の把握の上でマルクスは叙述をはじめたように信用論も単純な信用からはじめるべきであるし、この単純な信用は資本制社会に存在する信用であるから資本制社会で生起する信用の中の最も単純な信用といえる。しかしそれは資本制社会における信用の単純なもの、具体的存在であつて過去の社会に歴史的に存在して現在資本制社会には存在していないとする単純な商品、単純な信用なのではなくて、資本制社会に現存する資本制社会の商品、資本制社会の信用であり、その単純なものを具体的に示している存在である。この単純な商品、単純な信用は剰余価値をふくむ商品へ論理的に展開されて複雑なもの、論理の出発点をなしている。単純商品および単純商品の信用は単純ではあるが、いずれも資本制社会に存在するものであり、具体的に存在しつづつ、より発展した商品、発展した信用の状態を論理的に展開する出発点をなす資本制社会に存在する商品および信用なのである。したがつて「商業信用は資本制生産の範疇か単純商品生産の範疇か」といふばあい両者いずれも資本制社会に存在する商品であるから、その商品の信用による流通は両者を包含して、資本制的商品の信用、および単純商品の資本制社会内での信用の両者を含むものとして把握しなければならぬ。ただ論理的展開にさいしては単純なものから複雑なものへとすすむが、觀念的理論でなく、現存するものの論理であり、且つ存在していたものの論理でなく現に存在するものの単純なものから複雑なものへの論理の展開である。以上のことから商業信用は資本制生産、単純商品生産の両者をふくむ商業上の信用であ

る。両者の区別は支配的なものとしての資本制的商品への研究に焦点が合わされていくことにより、複雑なものへ論理がすすむにつれて支配的なものと、そうでないものとして論理的にも区別が生ずることとなる。そして支配的なものによって支配的でないものが左右されながら、相互に影響して一体をなして構成している現実社会そのものを、マルクスは問題としたのであり、観念的な社会をつくりあげてそれを分析したわけではない。

以上のように資本制社会に存在する商品は資本制的商品および剰余価値を含まない商品の双方をふくみ、これら商品の交換現象から両者に共通する価値を分析し、価値の実体を形成する労働と、労働の二重性を明らかにする研究の仕方は、現代を出発点とする歴史的遡及的な商品の分析であるとともに資本制社会のなかに存在している商品の下向的分析でもあり、歴史的遡及的分析も下向的分析も、いずれも窮極的には商品を生産する労働に到達するに至る。この労働は資本制社会における労働であるが、また歴史上のあらゆる局面において不可欠とされる労働であり、人間の自然に対する働きかけそのものである。そして人間対自然の相互関連は現代資本主義社会においても、また歴史上の如何なる生産様式のもとでも等しく欠くことのできない過程である。この労働によって商品が生産されるが「資本論」冒頭の商品は資本制社会に存在する商品で、資本制的商品、単純商品の両方が資本制社会で売買される過程で信用関係が生ずるのであり、流通過程での信用として商業信用があらわれる。ヒルファディングはこれに流通信用とか、手形信用とか、支払信用とかの表現を与えている。資本制社会での商品流通にともなつて生ずる信用は、資本制的商品、単純商品のいずれのばあいにも資本制内の信用であり、このことは資本制内の商品は剰余価値を含む商品も、含まぬ商品もともに資本制社会に存在する商品として広義の資本制商品であるのと同じことである。広義の信用貨幣は本来的信用貨幣と本来的商業貨幣に分けられる。資本制商

品も剰余価値を含む。本来的資本制商品と剰余価値を含む商品に分けられる。このような意味で資本論冒頭の「資本制の生産様式が支配的に行われる諸社会」には剰余価値を含む商品を支配的なものとしつつ、剰余価値を含まぬ商品も資本制社会の商品の一部を形成しているという理解は、単純な商品、単純な貨幣、単純な信用のいずれもが、資本制社会以前の歴史的な存在であつただけではなく、資本制社会の中にも現存しているとして把握することである。そしてこのような理解こそが資本制社会における現存するものの中の単純なものから、支配的であるとともに複雑なものへの論理的展開を観念的論理でなく、資本制社会の現実を反映した論理たらしめることとなる。

四 問題解明の根本問題 その二

このような方法論にかかわる問題は「貨幣の資本への転化」においても、またあてはまる。すなわち歴史的過程としての資本の解明と、資本制社会内部での資本の解明の相互関連において、歴史と論理が照応する場合の中心点が、歴史を常に念頭に置きつつも、常に現存社会内での問題が直接問題とされている点である。この点にかんして「貨幣の資本への転化」のはじめに次のような叙述がみられる。

「歴史的には、資本は、いたるところで何よりもまず貨幣の形態で、貨幣財産―商人資本および高利資本―として、土地所有に対応する。とはいえ貨幣を資本の最初の現象形態として認識するためには、資本の成立史を回顧する必要はない。同じ歴史は日々吾々の眼前で演ぜられている。新たな資本はいずれも、まず第一番には今なお相変らず貨幣―一定の諸過程をへて自らを資本に転形すべき貨幣―として、舞台に、すなわち商品市場、労働

市場または貨幣市場というような市場に現われる」(資本論(2)二八三頁、青木書店)。すなわち歴史は日々眼前に展開されているのである。そしてこの「貨幣の資本への転化」のところで利子生み資本の問題も産業資本の問題ともなすでにマルクスの念頭におかれている。このことは次の叙述の中にうかがうことができる。

「 $G-W-G'$ は、なるほど資本の一種たる商人資本にのみ独自の形態のようにみえる。だが産業資本もまた貨幣のみずから商品に転形し、そして商品の販売により、みずからをより多くの貨幣に再転形する貨幣である。購買と販売との合間に流通部面の外部で行われる諸行為は、この運動形態を何ら変化させない。最後に利子生み資本においては $G-W-G'$ という流通が短縮されて、媒介なしのその成果において、いわば簡潔体で、 $G-G'$ すなわち、より多くの貨幣に等しい貨幣、それ自身よりも大きい価値としてみずからを表示する」(前掲書二九七頁)と。

ここでの資本は、剰余価値を生産する資本と、取得する資本の両者をふくめての説明であり、それを前提とした上で次に剰余価値の生産にかかわって「等価物同志が交換されるならば剰余価値は生じない。また非等価物同志が交換されても、やはり剰余価値は生じない。流通または商品交換は何らの価値も創造しないのである」(前掲書三〇九頁)とのべ、価値創造と価値実現のちがいを明らかにし、「資本の基本形態、資本がもって近代社会の経済的組織を規定する形態―にかんする吾々の分析において何故に資本の卑近な、いわば大洪水的な諸姿勢、すなわち商業資本および高利資本がさしあたり全く顧慮されずにおかれるかは、こうしたわけなのである」(前掲書三一〇頁)として生産過程での価値創造、すなわち剰余価値の生産への説明の布石がおこなわれている。しかし、これはあとで「吾々は、吾々の研究が進むにつれて商業資本と同じように利子生み資本を派生的形態として

見出すであらう。それと同時に、何故にそれらが歴史的に資本の近代的基本形態以前に現れるかをみるであらう（前掲書三一―二頁）とのべて、資本の近代的的基本形態に対する派生的形態として商業資本、利子生み資本が論ぜられることが予告され、且つその派生的形態の派生的形態たる所以は、価値創造即ち剰余価値の生産にかかわつての問題である点が明らかにされている。しかし剰余価値を取得する資本としては、すでに商業資本、利子生み資本は貨幣の資本への転化をめざして産業資本と同じく「吾々の眼前で日々演ぜられる」ものとして商品市場、労働市場、貨幣市場で、貨幣が資本たるべく登場するのである。

「貨幣の資本への転化」において剰余価値を取得する資本としては産業資本と同じく商業資本も利子生み資本も資本としてあらわれるのであり、価値創造即ち剰余価値の生産は産業資本によって生産過程においてのみ行われるため、利子の取得をめざす利子生み資本は資本としてのその成立さえもが、価値創造、剰余価値生産に直接関与しないため、産業資本によって成立させられるものとして取扱われてきた。産業資本が剰余価値を生産し、その一部を利子として分与することによって利子生み資本が成立するとときには、産業資本によって創造された利子生み資本ということになる。もし剰余価値を取得する資本に造り変えられた資本として利子生み資本が登場するときには、産業資本が剰余価値を生産する以前に利子を取得する資本として存在していたものが、産業資本に適合するように従属させられるわけであり、新しくつくり変えられた資本となる。産業資本との関連では剰余価値は生産しないが取得する資本として利子生み資本は日々眼前に運動を展開する。この利子生み資本は商業資本と等しく、産業資本の生産する剰余価値の中から分前を入手するという意味での派生的形態の資本となるが、資本として価値増殖をめざす点では産業資本、商業資本、利子生み資本は共通している。それが資本制社会

においては産業資本に従属してつくり変えられるものとなるが、存在しないものが忽然と産業資本の分身になるのではなく、既存のものが産業資本によって近代的資本につくり変えられるものにはかならない。このことは剰余価値の生産は産業資本が行い、利子生み資本は利子として剰余価値の一部を入手し、資本としては産業資本と同じく利子生み資本も終始、価値増殖をめざすが、社会的分業にもとづく分担局面のちがいにより、剰余価値の生産に直接たづさわる資本と、その配分をうける資本とにわかれる。しかし資本としては等しく「貨幣の資本への転化」として「日々吾々の眼前で演ぜられている」のである。

以上のことは労働力の商品化においても、労働力の中には生産過程で価値の創造、剰余価値の生産に従事する生産的労働の担い手のほか、剰余価値の生産には直接従事しないで流通過程で活動する商業労働の担い手や、金融活動に従事するが剰余価値の生産に直接関与しない金融労働の担い手、これら各種労働の担い手が、労働力商品として、労働市場に登場し、剰余価値の生産とともに、その配分労働に従事する。これは貨幣を資本の最初の現象形態として認識するのに、歴史的に資本の成立史を回顧する必要があるとマルクスがのべた如く、労働力商品についても成立史を回顧するまでもなく、労働市場で労働力が商品としてあらわれ、しかもその労働力はすべてが価値を創造し剰余価値を生産する労働力でなく、剰余価値を取得する労働に従事する労働力も、商品として労働市場にあらわれるのである。労働の多様化は、資本の多様化と相互関連し、産業資本、商業資本、利子生み資本という資本の多様化は、生産労働、流通労働、金融労働において労働の多様化と結びついている。そして多様な労働の担い手は、等しく労働力商品として労働市場で売買され、資本は貨幣形態において商品市場、労働市場、貨幣市場において価値増殖をめざして登場する。「貨幣の資本への転化」は労働力の商品化をともなっている。

るが、それは資本の多様化とともに労働の多様化をも含むものである。このことは資本と労働力のすべてが、ま
ず産業資本となり、したがって労働はすべて生産過程で剰余価値を生産するという仮定にはじまってそれがさら
に分裂して一部は商業資本、他は利子生み資本となり、また労働力も生産的労働が後に流通労働と金融労働に分
裂するという想定とは異にするものである。現存する社会の現実において、それを対象とする経済学は、このよ
うな観念的に想定された状況を前提とすることなく、より現実的に、まず蓄蔵貨幣の全部でなくて一部が、そし
て労働力商品の全部でなくて一部が商品市場、労働市場を媒介として産業資本に転化し、さらに他の蓄蔵貨幣と勞
働力が商品市場、労働市場を媒介として商業資本に転化し、さらに他の蓄蔵貨幣と労働力が商品市場、労働市場、
貨幣市場を媒介として利子生み資本として主体的に運動する。これらすべて貨幣形態において商品市場、労働市
場および貨幣市場にあらわれ、そこで資本に転化し、転化した資本は生産過程をその中に含む産業資本を基本的
なものとし、産業資本の生産した剰余価値の取得をめざす商業資本、利子生み資本を派生的なものとし、それぞ
れ生産過程、流通過程、金融過程と重点活動領域を異にするが、等しく資本として価値増殖をめざして相互に競
争を展開する。その結果としていずれの過程の資本も、自由競争の段階から独占の段階へ進展することによって、
産業資本、商業資本、利子生み資本のいずれも、それぞれの業界で独占力をもつものがあらわれ、巨大産業資本、
巨大銀行資本、巨大商業資本の成立と、これらによる業界の支配ならびに相互の結合による金融資本（巨大結合
資本）の成立へと進展する。

「貨幣の資本への転化」は剰余価値の生産にかかわる生産過程への導入点であるだけでなく、それとならんで
商業資本、利子生み資本の成立にも産業資本の成立とともに結びつくものであり、商品市場、労働市場、貨幣市

場は、この産業資本、商業資本、利子生み資本のいずれにも不可欠な共通の市場なのである。これらの市場を前提とし且つ結果として資本の多様化が進展し、労働の多様化もそれとともに進展する。資本の多様化、労働の多様化は「貨幣の資本への転化」の過程で、それぞれ個別諸資本として個別諸資本の運動を通じて多様化をとげ、それらは社会的総資本の一環を形成し、全体として社会的総資本の再生産と流通を形成する。

以上のように理解しないで、すべて産業資本に転化してから、他の資本が産業資本から分裂して成立するとするときは、信用の領域では、まず(1)産業資本相互の間に信用が成立し、(2)産業資本の運動過程で遊離貨幣資本が形成され、(3)この両者を要因として「銀行信用」の成立となる。そこから産業資本が商業信用のみならず、「銀行信用」をも取扱う主体となり、産業資本即利子生み資本、利子生み資本即産業資本という循環論におちいるだけでなく、貨幣信用即ち貨幣形態での信用の担い手を産業資本とすることにもなる。産業資本は貨幣を資本として前貸するが、貸付けるわけではない。この点からも産業資本即利子生み資本とするだけでなく、産業資本即銀行資本とする非現実的な観念論となる。この場合には商業信用と銀行信用をも信用貨幣としてとらえて両者の区別をしないヒルファディングの考え方に結びつき、さらに「銀行信用」即銀行資本として両者を同一視したり、また銀行資本と利子生み資本が同一視されることになる。

もともと産業資本は(1)商業信用を利用するにとどまり、産業資本は銀行信用の担い手ではないのである。また(2)産業資本はその運動過程で商業信用を利用し、不可避的に貨幣資本を遊離し、信用利用増大は遊離貨幣資本の増大、信用利用減少は遊離貨幣資本の減少となるほか、減価償却や利潤の蓄積など遊離貨幣資本を取扱うけれども、社会的にこれら遊離貨幣資本を取扱うのは産業資本自身のほかに、専門業者としての銀行資本がある。(3)銀

行資本の貨幣取扱による貨幣準備の蓄積、それを元本とする商業信用の代位、銀行信用（銀行券、帳簿信用）の生成となる。それ故(4)産業資本は利子生み資本でないし、産業資本の運動中に生ずる信用関係は銀行資本の蓄積する貨幣蓄積を元本として、商業貨幣に代る銀行信用貨幣の発行となり、利子生み貨幣資本の配分と、有価証券などの利子生み貨幣資本の投下部面が、擬制資本として出現する。そして(5)利子生み資本は貸付可能な貨幣資本、貸付けられた貨幣資本として銀行資本が処理し、銀行資本は産業資本、商業資本と同じく価値増殖をめざす利子生み資本の主體的担い手となり、独自の活動を展開するに至るのである。

産業資本と銀行資本・利子生み資本は、それぞれ独自性をもって独自の資本として運動することが忘れられて、すべて産業資本に発し、産業資本へ還元するときには、産業資本と他のすべての資本の同一視の結果、すべての資本を産業資本の分枝とみなして、それぞれの独自性を見失う。とりわけ産業資本は生産過程に従事するが利子生み資本は生産過程、流通過程と異なった過程で運動する資本であり、産業資本の運動とは根本的に異なった領域での資本であることを忘れて見失うことになる。資本制社会の金融活動の果す決定的意義は、産業資本そのものが利子生み資本との関連によって金融資本に転化することをみれば極めて明らかである。そして産業資本、商業資本と銀行資本の利潤分割をめぐる闘争の過程で、資本相互の結合が進展し、主體的には金融資本（巨大結合資本）の成立と、社会的には独占の形成へと進展する。

五 商業信用と本来的貨幣信用

「商業信用において貸付けられる対象は何か、商品か貨幣か」（経済評論一九七六年六月一二三頁）という問題提

銀行信用・利子生み資本の論理的前提（小牧）

起にかんして、貨幣が貸付けられるとする見解があるのも、また問題を混乱さす原因になっている。しかしこれもその源をさぐればヒルファディングに帰因するといえよう。ヒルファディングは「金融資本論」において「資本論」を継承して信用問題を発展させたときれる位置づけにあるが、一面では信用問題を曲解する源流をものしている。彼は第一篇、第一章、貨幣の必然性において「人間の生産共同体は原則として二種の仕方で構成されておりうる。第一にはそれは意識的に規制されていることがありうる。……この意識的組織を欠く社会は、趣を異にする。それは相互に独立な諸個人に分解されていて彼らの生産はもはや、社会の事柄としてでなく彼らの私事として現れる。かくて彼らは分業の発展に強いられて相互に関係を結ぶ私的所有者である。彼らがこの関係を結ぶ行為は、彼らの生産物の交換である。この行為によって初めて、ここではすなわち私有と分業とによってその原子にまで打ち砕かれた社会にあつては関連がつくり出される」（金融資本論上二五〜六頁岩波書店）とのべ、「理論経済学の任務はこのように規定された交換の法則を見出すことである」（前掲書一七頁）として、

「社会の生産は個々人の交換行為の条件となるのであるが、その個々人というのは、ただ交換行為を通じてのみ相結合されて社会をなし、彼らのあいだに割当てられねばならない社会的総生産の成果の分け前にあずかる個々人である。……かような交換行為の内部では財は商品になっている。……それが商品となったのは、この財の生産者たちが相互に独立の商品生産者として相對せざるを得ないような一定の社会的關係に立っているからである。……そこで生産共同体としての、したがって労働共同体としてのこの社会の法則を見出すことが肝要になる。かくて新たな観点のもとでは個別労働がこの生産共同体の処理する総労働の部分としてあらわれる。この観点のもとにおいてのみ労働は価値形成労働として現れる」（前掲書二〇〜一頁）。

このようにはじめに計画経済の共同体と私的所有・分業の共同体とを対比して、私的所有・分業の共同体では

交換によって社会的関係が生ずるとして、交換現象を重視する。そして生産は交換の条件をなしているとして生産された財貨が交換され、商品となり、それぞれの個別労働が社会的総労働の部分としてあらわれ、労働は価値形成労働となるとする。ヒルファディングの考え方によれば生産物は、人間の交換行為によって商品になり、その価値は社会総労働の部分としての個別労働にもとづくものである。物と物との関連の背後に社会関係がみられるというよりも、人と物との関連をまず設定し、その物を人間が他の人間と交換することによって社会関係が形成されるとする。人間の交換行為で社会関係が成立したヒルファディングの方法は「商品論」よりも生産共同体の比較からはじめ、そして交換行為を重視することにより、共同体の体制のちがいを明らかにしたけれども、マルクスが商品に内在する二要因（使用価値と価値）、さらに労働の二重性を解明し、労働生産物たる商品が、その内的矛盾によって物と物との関連として運動し、物の運動の背後に社会関係の成立をみたのと異なる。すなわち物の運動による社会関係の成立と、人の行為による社会関係の成立というように根本的に異なったとらえ方となる。

商品矛盾の自己運動としてでなく、人の行為による物の運動というとらえ方から、商業信用において人が、何を信用で貸付けるのかとして、商品か貨幣かと問うことになる。そしてヒルファディングは金融資本論第五章銀行と産業資本の章で「信用はまず第一に支払手段としての貨幣の機能の変化の単純な結果として現れる」とのべたあと「実際に販売が行われてからある時間の後に支払が行われるならば、この時間中は貨幣が信用貸されることになる」（金融資本論上二二頁岩波書店）とのべたり、他方で「ここでは信用は生産的資本家たちによって相互に与えられる。ここで資本家たちが互に信用貸するものは彼らにとっては商品資本をなすところの商品であるが、

しかしそれは販売に際してその社会に妥当する態容ですでに実現されたものと想定される一定の価値額の単なる担い手としての商品であり、したがって手形によって代位される一定の貨幣額の担い手としての商品である」（前掲書一二三頁）とのべて「一定の貨幣額の担い手としての商品」が信用貸されるとしている。このように貨幣が信用貸されているとすると、商品が信用貸されているという二面を示している。商業信用においては商品が貨幣かのいずれが信用貸されるかは、両者に共通する価値が信用貸されるという同一性での信用とともに、商業信用では商品形態での価値の信用貸であり、貨幣形態での価値の信用貸ではない。貨幣での信用貸は明らかに貨幣形態での貸付である。信用の返済にさいしては一定の価値が貨幣形態で返済されるのは商業信用でも、貨幣での貸付のときにも共通している。相殺による信用の決済のほかは、差額は貨幣形態で決済される同一性ととも、決済を必要ならしめた原因も等しく信用関係にあるが、その場合でも商品形態での信用貸と貨幣形態での信用貸とは、現実に差別性をもった信用である。貨幣形態や商品形態の両者に生ずる信用関係では、貨幣で窮極的に支払がなされるとしても、その間、何によって信用関係が生じたかの区別、すなわち商品形態によるものか、貨幣形態によるものかは区別可能であるし、したがって明確に区別しなければならぬ。商品形態の価値と貨幣形態の価値は価値としては共通しているとしても、価値の商品形態と価値の貨幣形態は商品と貨幣商品は差別があるように区別されうる。商業信用においては価値の商品形態が売買され、価値の貨幣形態で決済されるが、価値の貨幣形態での貸付と価値の貨幣形態での決済とは明らかに異なっている。けだし価値の貨幣形態での決済によって信用関係は消滅するのに対して、価値の貨幣形態での貸付によって信用関係が発生する。そして商業信用において売手は債権者、買手は債務者となる関係が生ずるが、商品で価値が貸付けられているが、貨幣で価値が貸付

けられているのではない。

「商業信用における実現の時点はいつか、商品引渡時点か、代金支払時点か」（経済評論一九七六年六月一二四頁）についても売手からみた商品引渡時点は、買手からみれば商品受取時点であり、代金支払時点は売手からみれば代金受取時点である。売手にとっては商品引渡時点と代金受取時点とは時間的に経過しており、買手にとっては商品入手時点と代金支払時点は時間的にへだたっている。商品売買と貨幣受払の時間的ずれにおいては、支払手段としての貨幣が登場するまでの間は、商品はすでに譲渡されていて、商品が貸付けられているのではない。価値は貸付けられているが商品は譲渡されているのである。買手は商品を購入しているが、価値を一時借りているのであり、商品売買はおこなわれている。売手は商品を手放した時点で実現されて債権者として請求権をもち、買手は買入れた時点で債務者として登場している。商品の売買と、債権・債務の決済時点が異なるのは信用の特徴であり、信用による売買で実現の時点を貨幣での支払時点に求めれば、その間は貨幣が貸付けられているとしよう。これに対し信用による売買で実現の時点の商品売買の時点に求めるならば、その後は価値が貸付けられているが、それを示す用具としての手形は一定の貨幣額において価値を表示し、相殺されれば貨幣の受払なしに決済される。実現の時点は相殺のおこなわれる場合も、相殺がおこなわれない場合も、いずれの場合にも商品の売買がおこなわれた時とすべきであろう。ただし商品の売買において商品形態の価値と貨幣形態の価値は、価値としては共通しているとしても価値の商品形態と価値の貨幣形態は商品と貨幣商品の差別があるように区別されるし、商業信用においては価値の商品形態が売買され、価値の貨幣形態で決済されるが決済が完了するまでの間は、債権者・債務者の関係が成立し、商品譲渡時点で商品の流通がおこっていて、商品の貨幣への姿態変換は信

用用具によって実現したといえよう。ただし信用用具は本来的商業貨幣として貨幣に代って一定の限界はあるが流通手段の作用をも果しうるからである。

「商業信用において節約されるものは何か。資本(あるいは資金)か貨幣か」(前掲書一二四頁)という問題提起は、商業信用の効果が資本にあらわれるのか貨幣にあらわれるのかという問題であるが、「商業信用の限界とは何か。資金の節約の限界か、貨幣節約の限界か」(前掲書一二五頁)の問題提起も、限界をなしているものは資金なのか貨幣なのかという問題である。そのいずれもが産業資本の運動の過程で生ずる商業信用がもたらす効果とその限界を貨幣または資本(資金)との関連で説明するものであるが、商業信用はこの場合は、産業資本の運動のもとで生ずるものとの理解から出発している。商業信用の段階での問題が「貨幣信用」の問題と関連すると、「銀行信用とは何か―信用創造か媒介か」として貨幣信用の問題が提起されてくる。「貨幣信用」とは何をさすのかについての説明が重要であるとの指摘は正当といえようが、この問題の中にあやまれる前提から出発したために起るさまざまな問題が紹介されてくる。「資本論」は正しい前提に立って正しく読まなければならないことを十分に感じさせているのは、銀行信用の項に特に顕著である。

「貨幣信用」については「資本論」に次のような叙述がみられる。すなわち

「この商業信用のうえに本来的な貨幣信用がつけ加わる。産業者や商人たちの相互の前貸が彼等にたいする銀行業者や貨幣貸付業者の側からの貨幣の前貸と混和する。手形の割引の場合には前貸は名目的なものにすぎない。ある製造業者が自分の生産物を手形とひきかえに売って、この手形をビルブローカーに割引させる。事実上ではビルブローカーは取引銀行業者の信用を前貸するにすぎず、この銀行業者はまたビルブローカーに対して自分の預金者たち―これは産業者や商人たち自身から、しかしまた労働者(貯蓄銀行を通して)や地代生活者その他の不生産的諸階級から成立つ―の貨幣資本を前貸するの

である。かくして個々の各製造業者や商人は強大な準備資本の必要ならびに現実的環流への依存を免れる」(資本論①六八六頁青木書店)

以上のように銀行業者は預金者からあつめた貨幣資本をビルブローカーに前貸する。すなわち他人の貨幣を前貸し、ビルブローカーは取引銀行業者から手に入れる信用貨幣を、商業手形と交換に製造業者に引渡す。この手形の割引は「商業信用のうえに本来的な貨幣信用がつけ加わった」もので、産業者や商人相互間の商品流通に基礎をもつ商業信用、その用具としての商業手形に、銀行業者や貨幣貸付業者の側から産業者や商人に対して行う貨幣の前貸がまざりあつて「本来的な貨幣信用」となる。その場合、貨幣は名目的には前貸されるが実質上は信用貨幣を前貸するのである。このことは商業信用、その用具としての商業手形が、銀行信用、その用具としての銀行信用貨幣によって代位されることである。マルクスは「銀行業者の与える信用は種々の形態で与えられるのであつて、たとえば他の銀行あての手形、他の銀行あての小切手、同種の信用開始で与えられ、最後に、発券銀行の場合にはその銀行の自己銀行券で与えられる。銀行券とは、いつでも持参人に支払われうる、銀行業者によって個人手形に代用される、銀行業者あての手形にはかならない。この最後の信用形態は俗人には特に目立ち、重要に見える」(資本論⑤五七三頁青木書店)とのべて銀行信用形態を説明している。商業信用のことをヒルファディングは流通信用、支払信用、手形信用などとよんでいるが、「この商業信用のうえに本来的な貨幣信用がつけ加わる」というのは、手形信用のうえに銀行信用がつけ加わることを意味している。商業活動、銀行活動などを行う個別諸資本の信用は商業信用と銀行信用であるが、商品流通においては手形を用具として利用し、これら商業手形は、本来的な商業貨幣であり、銀行券等々は本来的な信用貨幣である(資本論⑩五六八頁青木書店)。

それ故、商業信用に代位する銀行信用とは、より具体的には本来の商業貨幣に代位する本来の信用貨幣のことであり、この本来の信用貨幣が本来の貨幣信用にほかならない。この本来の信用貨幣が本来の貨幣信用で銀行信用を意味していることは、本来の商業貨幣が手形信用で商業信用を意味することに照応している。そしてマルクスは銀行資本の諸成分において「銀行資本は(一)現金たる金または銀行券と、(二)有価証券とから成立つ」（資本論⑥六五七頁青木書店）とのべていることから明らかのように、現金として金または銀行券をあげている。手形は商業証券として有価証券に分類されている（前掲書六五七頁）。このことから手形に代位する銀行券とは手形に代位する現金のことにほかならない。

「銀行券等々は、貨幣流通—金属貨幣の流通であるか、国家紙幣の流通であるかをとわず—に立脚するのではなく、手形流通に立脚する」（前掲書⑥五六九頁）というのは商業信用に立脚して銀行券が流通することを示しているが、手形と銀行券は共通面をもっている反面、手形と現金という差別性もある。マルクスは「手形そのものは、その満期—支払日に至るまで重ねて支払手段として流通するのであって、これは本来の商業貨幣をなす。手形は、ついに債権債務の相殺によって決済されるかぎりでは、絶対的に貨幣として機能する。生産者や商人のこの相互の前貸が信用の本来の基礎をなすのと同様に、その流通用具たる手形は、本来の信用貨幣たる銀行券、等々の基礎をなす」（資本論⑥五六八—九頁）とのべ、そのほか「商業信用は信用制度の基礎をなす。その代表者は手形、すなわち一定の支払期限つきの債務証券 Document of deferred payment（延払証券）である。各人は一方の手で信用を与え、他方の手で信用をうける。吾々はさしあたり銀行信用をまったく度外視するが、これはまったく別の、本質的に異なる契機をなす」（前掲書⑥六七九頁）として信用貨幣を本来の商業貨幣と本来の信用貨幣

とに区別している。両者の区別をすべきところをヒルファディングはこの点を区別することなく、信用貨幣の中に商業手形と銀行券の両者を包含して理解し（金融資本論第三章支払手続としての貨幣—信用貨幣—）、信用貨幣という表現でマルクスのいう商業貨幣のことをも意味せしめている。例えば「信用貨幣は、資本家相互間の売買に基づいて生ずる。それは流通の内部で且つ流通に基づいて生ずる。信用貨幣の効果は金の現存額による制限から流通を解放することである。信用貨幣が作用する限り、金も早流通手段としては作用せず、したがって肉身をもって商品に相対する必要がなく、ただ最終の貸借の清算に用いられるにすぎない……。かくして価格収縮と販路梗塞とが、諸商品と引換えに振出された信用貨幣の価値を減少させる」（金融資本論上九一—三頁岩波書店）、というとき明らかに商業貨幣のことを意味している。ヒルファディングは信用貨幣に商業貨幣と銀行券の両者を含め、現金の中には銀行券を含めることなく「現金というのは、完全価値の金属貨幣、本位貨幣、銀貨幣、または金貨幣であり、これに社会的に必要な流通最小限の範囲内で存在する限りでの強制通用力をもつ国家紙幣と補助貨幣を加えたものである」（前掲書上一三五頁）、として銀行券を現金から除外してとらえている。国家紙幣と銀行券とは流通法則を異にするから区別し、手形と銀行券は流通法則を等しくするから同一視するというヒルファディングの考え方は、その結果として国家紙幣と手形との区別を明確ならしめるが、銀行券を現金から除外して手形と一しょに信用貨幣としてとらえ、信用貨幣概念の拡張と現金概念の縮小解釈におちいり、その追隨者たちをして「本来的な信用貨幣」、「本来的な貨幣信用」を誤解へと導くことになっている。ヒルファディングの信用論への貢献と誤まりとを正しく識別すべきにもかかわらず、信用貨幣概念や現金概念の混乱をそのままうけつぎ「本来的な貨幣信用」は銀行信用貨幣すなわち本来的な信用貨幣と同一物であることを見誤り、混乱を今日にま

で及ぼしている点は、速かに是正されなければならないだろう。

以上みたようにマルクスは硬貨および銀行券を現金として把握し、その貸付、回収過程に利子生み資本の運動をみる。したがって利子生み資本、銀行資本の運動は資本の運動となり、単なる信用制度論ではない。それにひきかえヒルファディングは現金と信用貨幣を区別するあまり「本来的な信用貨幣」を構成している銀行券を現金と区別する。その結果、信用貨幣による現金節約という流通費の節約の把握はともかくとして、銀行券が利子生み資本の具体的形態として価値増殖運動を展開するのを商業貨幣の運動と同一視し、利子生み貨幣資本の独自性を見失う。流通費の節約は商業信用においてもすでに生じており、銀行信用はそれを促進するが、銀行券は銀行の発行する手形とはいえ、金との兌換を約束した現金であり、「本来的な貨幣信用」は銀行券、等々の銀行信用貨幣においてあらわれるものである。

「本来的な貨幣信用」理解のあやまりの根源は（一）信用貨幣概念の混乱、（二）産業資本からのみ信用問題を解明しようとするあやまれる方法論である。その結果、（三）銀行資本への理論展開が付随的となり、銀行信用と利子生み資本との、銀行資本を軸とする関連が切断され信用論と利子生み資本論の分断を生み出す。（四）「本来的な信用貨幣」の基礎の第一は商業信用、今一つは利子生み資本にあるというマルクスの表現は、銀行信用形態での通貨が利子生み貨幣資本の運動を展開すること。したがってそれは貨幣信用であり、主体的には銀行信用であり、銀行券等々の「本来的な信用貨幣」と利子生み資本の統一的把握を示している。したがって信用制度は単なる制度でなく、資本の運動となる。

これまでは産業資本を前提とするのが信用問題や利子生み資本問題を究明する場合の当然の前提とされてきた。これも「貨幣信用」の理解が、これまで誤りを含んでいたのと同じく根本的な問題をもっており、信用問題、利子生み資本問題解明のための方法論として根底から再検討を必要としている問題である。この問題は「資本論」のあちこちに分散している信用にかんする問題を要領よく取まとめるようなやり方では解決不可能な問題であり、資本論理解の根本にまで立入って再検討することが必要である。そうすれば産業資本から出発していた信用論研究が如何に誤りであったかが明らかになるであろう。なお「銀行は信用制度の中核であり、信用制度が各方面に展開する起点となる。すなわち下方は商業信用、上方は一方に中央銀行、他方は証券市場、株式会社への接点となるので、その本質の究明は、信用論研究の一つの焦点となる」(経済評論一九七六年六月一二九頁)として銀行問題は「信用論研究の一つの焦点となる」との指摘があるが、それへの取組みにさいしても、これまでのように産業資本を前提として、それから問題をみるのであれば、商業信用はともかくとしても銀行信用および利子生み資本の問題の統一的解明は行きづまることになる。すなわち産業資本相互の関係から出発して商業信用は解明できても、商業信用と銀行信用との関連は、商業信用の銀行信用による代位とすれば、代位される商業信用は産業資本相互の間で生ずるとしても、代位する銀行信用は商業信用と流通法則を等しくする本来的な信用貨幣であり、産業資本との関連は商業信用を媒介として依然として継続する。その結果、商業信用のみならず銀行信用をも産業資本による創造物としてとらえて銀行信用と商業信用の同一視だけでなく、銀行資本の独自性さえも、

産業資本の機能の単なる代行者として位置づけられて了うことになり、それに加えて銀行資本と利子生み資本の相互関連についても両者が同一物としてとらえられ、社会的総資本の一環としての銀行資本が利子生み資本に吸収されるか、さもなければ利子生み資本の制度として信用制度に吸収され、個別諸資本としての銀行資本の資本としての独自性も見失われて了うことになる。それ故、正しい方法論に立脚して貨幣・信用論は根本的に再検討されなければならないだろう。

まず第一に、商業信用、銀行信用、利子生み貨幣資本、擬制資本および銀行資本などにかんする諸問題は、すべて「資本論」冒頭にある「資本制的生産様式が支配的に行われる諸社会」でのそれであるから、資本制社会が前提となっていることは当然といえる。そしてそこでの支配的な位置を占めている「資本」の成立の歴史的前提は、レーニンの要約したように、(i)商品、貨幣流通の比較的高度な発展水準のもとで、(ii)一定額の貨幣の蓄積と労働力の商品化である。

(i)の場合の商品、貨幣流通の高度な発展水準のもとでは当然のこととして資本制的生産様式のもとで生産された剰余価値を含む商品とともに、剰余価値を含まないとしても資本制社会に存在している商品が、資本制社会に存在する商品として現象する。この資本制社会内に実在する商品の内的矛盾の自己運動によって資本制社会の運動が展開し、この実在する商品の運動の反映として論理が展開されるのであり概念的な商品が論じられているわけではない。この場合の単純なものから複雑なものへの論理的展開の、単純なものとは、資本制的に生産された剰余価値を含む商品の抽象力による分析の結果として把握されるものであるにとどまらず、単純な商品そのものとして資本制社会内に実在している商品そのものである。いいかえると歴史上に存在していたという過去の存在

でなく、現に実在している資本制社会内の商品である。この単純な商品から剰余価値を含む商品に至るまで、単純なものから複雑なものへと論理が展開され、それは実在しているものの論理的展開にはかならない。但し社会内での支配的なものは剰余価値を含んだ複雑な商品であるが、剰余価値も根源的には価値であり、資本制社会内に実在している諸商品が問題とされていることにより資本制社会の構造とその運動法則が、現実的に観念的でなく解明されることとなる。商品は剰余価値を含んだ商品のみでないとする理解は、剰余価値を含まない商品も、商品として資本制社会の構造と運動に加わっている現実が、「資本論」では問題とされているということを方法的に裏付けるものである。たとえば現実に資本制社会の中で、単純商品生産者が生産手段から解放されて労働力商品の売手として労働市場にあらわれるケースと、すでに資本制商品生産者として剰余価値生産と取得に従事していたものが破産して生産手段から解放され、みずからが労働力の売手として労働市場に登場することとなるケースとは、いずれも労働力商品として労働市場に登場し、他方での貨幣資本に遭遇して資本制的生産および流通が展開するけれども、単純にして基礎的なものは単純商品生産者の労働者階級への転落であり、歴史的にも現実的にも前者が先行し、後者がそれに後続するという関連にある。これは資本制社会の中で諸商品の運動の結果として、貨幣のみならず労働力の売手をも創出することであり、そのための論理の出発点をなす商品は、資本制社会内に実在する単純商品であり、その生産者の生産手段からの分離により、労働力商品化が現実的に実現する。零細業者が労働者階級に入ることを示すこの論理は、資本制商品生産者が労働者階級になると想定するものではなく単純商品生産者が、まず労働者階級となるという歴史的にも且つ現実的にも事実にも即した想定である。そしてその論理的前提としては、剰余価値を含まない商品ならびに、その生産者の存在を、資本制社会内に現実に存在

するとして、それを単純なものとして論理の出発点に位置づけることである。剰余価値を含む商品の捨象によって単純商品が出現し、それは歴史上に存在していた商品と照応するとするだけでなく、現に資本制社会内に他の商品とともに実在し、資本制社会内の全商品の一部を形成しているという理解こそが、資本制社会の現実の構造と運動を観念的でなく現実的な論理として展開することを可能にする基礎となる。

つぎに「貨幣の資本への転化」において産業資本を中心課題として、生産過程への叙述が準備されるが、この「貨幣の資本への転化」は産業資本のみを成立させるものではなく、産業資本とともに商業資本や利子生み資本をも成立させるものである。このことは「貨幣の資本への転化」でまず産業資本が成立し、産業資本から利子生み資本や商業資本が派生するという従来の考え方とは必ずしも一致しない。けれども「資本論」のこの章で産業資本とともに利子生み資本も商業資本も成立するとするのは論理的にも且つ現実的にも事実である。生産過程、流通過程、金融過程の全関連は論理的に結びついていてはただでなく現実的にも相互関連のうちにある。剰余価値の生産を根底にもつとはいえ、剰余価値の生産と実現がおこなわれてから、利子生み資本が後発するのではなく、論理の順序は生産過程を第一とするが利子生み資本も産業資本も資本としては、貨幣が資本に転化するさいに同時的に成立する。このことは産業資本と利子生み資本は産業資本を親とし利子生み資本はそれから派生した子とする関連でなく、産業資本を兄とし利子生み資本を弟として等しく貨幣資本から発したものととして資本を理解することにつらなる。貨幣資本を共通の親とし、それが産業資本、商業資本、利子生み資本へと分立してゆくものとすると、まず産業資本が成立し、産業資本によって商業資本や利子生み資本が生み出されるとするのは似ているが必ずしも同じではない。貨幣資本を共通の親としている点を強調する考え方は、利子生み資本が産業

資本に対して従属しつつも、相対的独自性をその資本としての出発点から保持していた歴史的現実の論理的表現にはかならない。剰余価値と資本は相互に不可分の関連にあるが発生的には両者は同時存在であり、論理的には資本が先行する。産業資本と利子生み資本も発生的には両者は同時存在であるが、論理的には産業資本が先行する。あたかも資本制社会内で剰余価値を含んだ商品と含まぬ商品とは資本制社会内に実在する商品として併存しているが論理的には単純商品が先行することく、また貨幣機能において価値尺度機能と流通手段機能は発生的には同時存在であるが、論理的には価値尺度機能が先行するのと同じことである。

貨幣の資本への転化にさいして産業資本、商業資本、利子生み資本が同時存在として貨幣資本から出発することく、生産労働、流通労働、金融労働に従事する労働力は発現の多様性を蔵しつつも等しく労働力であり、労働力の価値規定によって規制されつつ、論理的には生産労働による剰余価値生産が先行して他の流通労働、金融労働が流通過程、金融過程で剰余価値取得をめざして活動することとなる。貨幣の資本への転化は同時に資本の多様化を内包したものであり、労働力の商品化も剰余価値の生産に結びつくだけでなく労働の多様化を内包している。

資本や労働における多様化は、論理的先行性によって順次に展開されることとなるが、発生的には同時存在であり、且つ全体として資本対労働力の関係として資本制的階級社会を包括的に表現している。「貨幣の資本への転化」の中に各種資本がすでに包みこまれたものとして、その詳細な展開は叙述の進展につれて明確化されることとなるが、詳細な展開がおこなわれる以前に、すでに資本一般として労働力一般とともにマルクスの念頭にあり、且つ包括的な説明もおこなわれている。以上のように資本一般は資本の多様化を、労働力一般は労働の多様

化を内包していて（一）各過程で運動する諸資本は、いずれも貨幣資本から出発する。産業資本から派生するとされる利子生み資本も商業資本も、すべて貨幣資本から出発するのであり、（二）その貨幣資本は剰余価値の分割を原因として産業資本から分かれた貨幣資本でなく、それぞれの貨幣資本として独自に且つ同時に存在するものであり、資本の運動を展開する過程で、剰余価値を生産する産業資本、それを取得する商業資本や利子生み資本へと社会的分業を展開するが、（三）これら諸資本は相互に作用し合って、全体として社会的総資本を形成し、社会的再生産と社会的変動を資本の運動過程で展開さす。（四）それとともに諸産業部門間の資本の競争による平均利潤率の形成や、独占形成が各産業部門のいずれにおいてもあらわれる。（五）それは産業資本・商業資本と銀行資本との間での利潤の分割をめぐる闘争とともに、利潤確保のための相互的結合をも生み出す。これら資本の出発点は単なる産業資本でなく、産業資本や商業資本、利子生み資本をも含んだより包括的な資本一般であり、具体的には貨幣資本であるといわなければならない。

第三に、利子生み資本は剰余価値の分配をうけるが、利子生み資本は産業資本によって新しく創造されたものでなく、造り変えられたものである。無から産業資本によって創造されたとする利子生み資本の把握と、産業資本に従属するように造り変えられたとする利子生み資本の把握のちがいが、商業信用と銀行信用の異同や「貨幣信用」を明らかにする鍵をなす。すなわち剰余価値生産と分配は異なるものであり、価値を創造し剰余価値を生産する産業資本の先行的な成立が、そのまま剰余価値の分配をうける各種諸資本の自立を意味するものではなく、各種諸資本は剰余価値取得において且つ貨幣資本として運動を展開する点において資本としての共通性をもつ。この点の把握が利子生み資本や銀行信用あるいは「貨幣信用」の理解にとって決定的意味をもつ。そして「貨幣

の資本への転化」は産業資本の成立や剰余価値の生産のための論理であるにとどまらず、各種諸資本の成立のための論理であることを認識することが肝要である。いいかえると社会の蓄蔵貨幣の全部でなくて大部分が産業資本として運動し、他の蓄蔵貨幣が商業資本、利子生み資本として貨幣資本から出発する資本の価値増殖運動を展開し、それに対応して労働力もその全部が生産労働に従事するのではなく、大部分が生産労働として剰余価値生産に従事し、残された労働力の一部は流通労働に、他の一部は金融労働に従事し、剰余価値実現と取得に関与する。資本としてはすべて貨幣資本から出発するが、その運動を展開する領域は、生産過程、流通過程、金融過程などそれぞれ重点を異にしており、そして労働力は労働力商品として労働市場で売買されるが、それらが従事する領域も生産過程、流通過程、金融過程というように、それぞれ異なっており、それに応じて産業資本、商業資本、利子生み資本として価値増殖をめざして運動する。これと異なり社会に存在する蓄蔵貨幣のすべてが産業資本に転化し、すべての労働力が生産労働に従事し、その上で産業資本の一部分が商業資本に転業し、さらに他の一部分が利子生み資本に転業し、それに応じて労働力も、はじめ生産労働に従事していた労働力が商業労働に転業し、さらに金融労働に転業するという論理は、剰余価値生産や生産過程にのみ目を奪われて剰余価値生産を軸に展開される観念的論理となる。それに対し前者は、剰余価値生産を一方にふまえつつ、それらの分配をうける資本は、それぞれ既存の貨幣資本が生産過程と異なった領域へ利潤獲得をめざして独自に進出して行くことを意味しており、既存の商業資本、利子生み資本は、あらたな条件のもとでは、資本制生産様式に適合したものととして造り変えられるという歴史的現実を反映した論理である。論理の観念的自己展開でなく、歴史的現実を裏付けとした論理的展開が現実的な論理である。

観念的に考えられる論理でなく、現実的に実在するものの歴史的、論理的方法による展開が現実的な論理といわなければならない。そして歴史的始源的なものは現存する社会においての最も単純なものであり、現実の下向的分析によって把握されたものは現実的実在であり、その上向論理は現実の複雑な現象を、単純なものを基礎とし論理的に意識の中に反映され、それが事実を対象とした現実の論理となるのである。